-BLACK DEVIL-

小夜時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
－ＢＬＡＣＫ　ＤＥＶＩＬ－

【Ｎコード】
Ｎ６６８５Ｆ

【作者名】
小夜時雨

【あらすじ】
ある日、少年の家に突然現れた『黒い箱』。不審に思いながら少年が箱を調べていると、突然声がした。曰く、とんでもない事に巻き込まれていく、と。そこから少年は日常と別れ、闇に生きる人間となる――。

始まり、始まり（前書き）

某、携帯コミュニティサイトでも同じようなものを書いていますので、そちらをもしも知っている方がいましたら設定パクってるんじゃないか、とか言われそうですが、そうならない事を願っております。お目汚しではなければ、目を通してみてください。この小説には一部、グロ表現があるかも知れません。どの程度からグロか分からないので、一応グロ表現があるかもしれないと、この場で伝えさせていただきます。

始まり、始まり

「おいおい……何だよ、これは？」

その少年は自分の家に堂々とに置いてあった見知らぬ黒い箱を半目になりながら眺め、呟いた。少年はこの春に高校二年生に進級したばかりの高校生だ。黒髪は長髪にはならないが、決して短くはない長さ。額にかかり、鼻先まで前髪は伸び、全体的な長さもそれに揃っていた。痩せ型の体格で、百七十センチ中頃くらいの身長だ。濃紺の制服のブレザーを脱いでハンガーにかけた。

少年の家は六畳一間のアパートだ。とある事情から、高校入学時から一人暮らしをしている。狭いお飾り程度の台所に、窮屈な浴室、小さなトイレと、少年に不満は多くあったが、都内で家賃月に一万円という安さから、我慢出来ていた。そんな彼の住むアパートに夕方帰って来ると、散らかった部屋のど真ん中に不審な黒い箱があったのだ。雑誌や脱いだままの服、趣味のエレキギターのスコアなどが乱雑になっている中、その黒い箱は物をどけられて放置――というには聊か語弊があるかも知れないが――されていた。

「宅配便とか？　……ある訳ねえか」

自分で出した仮定を否定し、少年は箱の前にどっかと座った。黒い箱は少年には見覚えがない。一辺が四十センチくらいの立方体で、漆黒に染まっていた。取っ手もなければ、飾りもない。完全な真四角で、それが少年にはどうも不気味に思えてならなかった。

「……」

このまま見つめていても埒が明かないとして、少年は恐る恐る手を伸ばした。黒い箱に手の平が触れる。冷たくて、硬かった。金属とは違う感じもするが、木でもなければプラスチックでもなさそうだった。扉を叩くように、軽くノックしてみる。数秒したが、何の反応もない。手に持ってみると、見た目の割りには重かった。ノックした感じの音だと、中に何かが入っている感じもした。だが、蓋は

ない。
「何なんだ？」
不審に思いながら少年が黒い箱を置いて、むぅ、と唸りながら腕を組んでみた。渋い顔をしながら黒い箱を睨みつけ、どうすべきかを考える。無視して放置しておくか、どこかに捨てにいくか、警察に届けてしまうか、保管しておくか。とりあえず四つの選択肢が少年の頭に浮かんだ。だが、どれも気乗りしない。無視するのも気になりそうな気がするし、捨てにいくのだってこんな物を持ってごみ捨て場まで行くのはどうも面倒だ。警察に届けるのは余計に面倒だし、保管するにしても得体の知れないものを持っておくのは気が引けた。
「……何か気になるから、駄目なんだな。よし、いっそ壊そう」
何を思ったのか、少年はそんな結論にたどり着いた。黒い箱をそのままにし、押入れから工具箱を出した。一人暮らしする時に何故か家から持ってきた物だ。そこから金鎚と鑿、ペンチやスパナなどを取り出して、黒い箱を卓袱台の上に置いた。ごくりと生唾を飲み込み、まずは金鎚を振りかぶった。ガンッと大きめの音がして少年は黒い箱を見た。傷一つついていなかった。
「硬いな、こりゃ……」
呟いて、少年は畜生め、と黒い箱に言ってまた金鎚を振り上げる。今度は遠慮の欠片もなく、金鎚を振り下ろした。より大きな音がして、でも少年は止めなかった。ガンッ、ガンッ、と大きな音を立てながら少年は諦めずに金鎚を振るう。
「これで、ちったぁ傷くらい――」
言葉は驚きによって途中で飲み込まれた。少年は力の限りに叩いていたはずなのに、黒い箱には少しも傷がついていなかった。それどころか、少年の手が僅かに痺れ、畳に卓袱台の足がめり込んでいた。流石にこうなっては少年も安易な考えを捨てる事にした。
「きっと、これは……俺に対する挑戦だな？」
訳の分からない事を呟き、少年はふっと得意げに笑った。少々、楽天的でお馬鹿な所がある少年なのだ。学力的な馬鹿ではなく、何事

も安易に――と、いうか独特のオリジナリティに溢れる解釈をしてしまうので、性質が悪い。
「壊してみろ、ってか？　この箱野郎。おう、上等だぜ。お前なんか絶対に壊してやる。その中身、今から覚悟しやがれ」
何とも勝手な独り言を言い、少年は工具箱から鋸を取り出した。黒い箱に片足をかけ、鋸のギザギザの刃を箱に当てる。一息ついて呼吸を整えてから、鋸の刃を引いた。――途端、鋸の刃がぐにゃりと曲がって、そのまま折れてしまった。折れた刃が少年の頬を浅く掠めて、赤い血をたらりと流した。冷やりとした感覚を覚えつつ、折れた鋸の柄と箱を交互に見た。文字通りに『刃』が立たなかったのだ。
「何だ、こりゃ――？」
硬くて、重くて、不気味な存在感を醸し出している黒い箱を見つめたまま、少年は呟いた。傷の一つもつかないそれは、少年に得体の知れない恐怖を醸し出した。黒い箱を持ち上げて、顔を近づけて凝視する。細かな傷すらもなく、指紋もつかない。持った感覚としてはただそこに在る形も持っているような、材質も僅かな熱も感じられない、何とも不思議な感じだ。
『――なかなか、面白い性格をしているじゃあないか』
「そりゃあどうも――って、あれ？」
どこからかした声に返事をしたところで、少年は声の出所に戸惑った。黒い箱を持ったまま、周囲を見る。部屋には窓から夕陽が差し込み、柔らかなオレンジ色に染まっている。物静かなアパートで、少年の他に住人といえば大家しかない――はずだ。それなのに、どこからか声は確かに聞こえてきたのだ。
『お前の持っている箱だ』
声は少年の戸惑いに、そんな答えを出した。声の感じとしては若い男性のものだ。どこか偉そうで、口調は静かだが威圧感を感じられないでもない。低すぎず、決して高い声でもない。
「箱？　……こん中にあんたが入ってんのか？　出て来い、つか、

どうやって入ったんだ？　何で俺の部屋に居るんだよ？」
矢継ぎ早に少年は質問をした。驚く所は他にもあるかも知れないが、そこは少年の独特の性格だ。彼にとっては些細な事でしかなかったらしい。
『初めに断っておくが、これは封印だ。これを解いたら、お前はとんでもない事に巻き込まれていく事になる。それでもいいなら、右手を開いて箱に押し当てて念じてみろ。開け、と強くな。よく考えてから――』
声は続いていたのに、少年は右手を黒い箱に押し付けた。そのまま聞く耳も持たずに目を閉じて、ただ一心だけ頭に浮かべ、それを口に出した。
「開け」
すると、黒い箱から強烈な光が漏れだした。六畳一間の小さな部屋を強い光が埋め尽くして、少年は反射的にきつく目を閉じた。すると、足が畳から離れていく感覚をした。さらに上下、左右の感覚が分からなくなり、目を開けると混沌とした黒と紫の混じり合った空間を真っ逆さまに――いや、もしかしたら真上に向かっているのかも知れないくらいにあやふやな感覚をしたまま、引っ張られていた。そして、ふと気付くと少年は黒一色の不思議な空間に、ただ一人で立ち尽くしていた――。

其処は悪魔と少年の世界

「ここ……どこだ？」
少年は呟いて、周囲を見た。前方、ずっと暗闇。後方、同じく永遠と暗闇。右、果てのない黒一色。左、奈落の底かと思えるくらいに真っ暗闇。上、最早黒としか表現のしようがない暗闇。
『ようこそ、影宮真吾。俺の居住地へと』
先ほどの声がし、少年は肩越しに後ろを振り向いた。そこには若い男性がいた。年は二十歳半ばくらいだろうか。仕立てのいい漆黒のスーツに身を包んだ身なりのいい男性だ。黒いシャツ、黒いタイ、黒いズボンに、黒い上着。綺麗な顔は整っていて、すらっとした彼の体格はまるでモデルだ。黒曜石のような黒色の瞳、濡れた烏のような艶やかな黒色の髪。その男性は黒を象徴としているかのような出で立ちだった。だが、切れ長の細い目にはどこか近づきがたい雰囲気が感じられる。
「何で、俺の名前……」
驚きに目を丸くして少年が呟いた。男性はにやりとした笑みを口元に浮かべ、目を細める。
『すでにお前は俺から切っても切り離せない関係になった』
「……どういう事だよ？」
幾分、眉をひそめて少年は尋ねた。すると、男性が大仰に腕を広げ、大衆に語るような口調で話し出した。
『俺はきちんとお前に警告をした。箱を開けたらとんでもない事に巻き込まれていく、とな。ところが、お前は何の躊躇いもなしに、好奇心のまま、箱を開けてしまった。あの箱がどういった物かも知らぬままにな。今から、簡単に説明をしてやろう。一応、端折るつもりではいるが、何も知らないお前に説明をする訳だから長くなってしまうかも知れぬな』
男性が言って、右手を挙げた。そして、パチンと指を鳴らすと少年

の真後ろに突如として一人掛けのソファーが出現した。それに驚き、少年は男性を凝視した。
「……マジシャンか？」
『いや、違う。まあ、掛けるといい。俺はこう見えても親切だからな。何なら、茶と菓子でも出してやろうか？』
「いや、いい」
何だか信じられなくて、少年は恐る恐るといった様子でソファーに座った。ふかふかで、体が尻から埋もれてしまう。少し前屈みに座り、男性を見た。
『話を続けよう。まず、俺という存在を教えてやろう。名はないが、俺は悪魔と呼ばれる存在だ』
「はぁ？」
胡散臭いとばかりに少年の眉間にしわが寄った。とても信じがたいが、とりあえず今は黙る事にした。
『そして、お前は俺の下僕――いや、運命共同体、とでも言っておいてやろうか。悪魔の俺とお前は契約を交わしてしまった。だから、お前が死ねば俺も死に、俺が死ねばお前も死ぬ事になる。まずはこれを絶対に忘れないようにしろ』
「……あんた、頭、大丈夫か？」
『無論だ。俺は全知全能の悪魔神様だぞ？　お前はまだまだ生まれたてだが、俺はお前の何万倍も生きてきたんだ』
「生まれたてだぁ？　俺はもう十七だ。訂正しやがれ」
『たったの十七年ではないか。俺はお前の先祖が人でなかった頃から存在しているんだ。それに比べたら百年、二百年でさえもうたた寝に過ぎないんだぞ？　お前の生きた十七年など、欠伸をしている時間も同様だ』
「……」
どうにも訳が分からず、少年は面倒になって黙った。ふむ、と顎に触れ、男性はまた話を続けた。
『やはり、信じられないか。まあ、最初はそのようなものだ。そ

の内、これが現実なのだと気付くだろうな。――さて、まずは契約の確認からしよう』
「契約？」
『そうだ。悪魔たる俺は、残念ながら人間と共に居なければ目的を達成する事が出来ぬのだ。だから、宿主――今の俺にとってのお前だ――に能力を貸し与えて、目的達成の為に尽力を尽くしてもらう』
「おい、その言い草だと俺は、何か？　良いように利用されるだけじゃねえか。よくは分からねえけど、俺にメリットがなくて、お前にはメリットがあんだろ？」
『おお、頭がなかなか動くじゃあないか。関心したぞ』
どこか小ばかにしたように男性は言った。どうも喋り方が偉そうだ。
「うるせえ。とにかく、俺は誰かに良いように利用されるなんてごめんだぜ。さっさと諦めちまえ」
『それが、そうも行かないんだ。すでに契約をしてしまったからな。破棄したいなら、してもいいが……お前の魂を献上してもらうぞ？』
「知るか！　俺はお前みたいなのと何の約束もした覚えはねえ！」
『何を今さら言っている？　箱を開けたではないか。あれは封印だと言っただろう？　その封印の解除は、つまり、俺との契約を意味しているんだ。説明してやろうと思ったのに、さっさと封印を解いてしまったのだから今さら文句なぞ、受け付けないぞ』
男性が少年に歩み寄り、黒曜石のような瞳で少年の目を覗き込んだ。すると、少年は今までに感じた事のない寒気を背筋に感じた。凍り付いてしまうかのような、猛烈な寒さ。怖いとさえ思えた。
『続けるぞ？』
少年の後ろに回り、肩に両手を当てて揉みながら男性が言った。大して気持ちよくもないが、別に不快でもないから少年は拒みはしなかった。
『俺の目的の達成の為には、俺の魂を黒く染めなければならない。どうやったら、染まるか。これが、お前にしてもらう事だ』
ソファーを回し、少年を自分に向かせて男性がにやりと口元を歪め

た。
「……んだよ？」
『他の悪魔の魂を頂く』
その言葉に少年は眉をひそめた。悪魔など、目的などと言われても少年は理解出来ていなかった。
『まあ、話は最後まで聞くがいい、影宮真吾。先ほど、お前は言っていたな。メリットがない、と。だが、それが在るから、契約なのだ。お前の願いを何だっていい、俺が叶えてやろう。だから、俺の目的に強力をするんだ』
「願い……？」
『そうだ。在るだろう？　例えば、世界を崩壊させたい、とか。一生を遊んで暮らせるだけの金が欲しい、とか。ハーレムを築きたい、とか。独裁者になりたい、とか。どんな事をしても自分だけ罪にならない世界にしたい、とか。死者を生き返らせようと、不老不死を願おうとも、いい。俺を殺したい、という願いだっていいさ。俺の目的が達成された時に、お前の願いを何だって叶えてやる。それが――メリットだ』
男性が身を乗り出し、少年にぎらついた黒い瞳で言った。どこまでも黒くて、吸い込まれそうになる。その目を見ているだけで、急に男性の言葉を信じられない気持ちは失せていった。
「……じゃあ、聞くけど、他の悪魔の魂を頂く、って言ったな？　実際にはどうするのか教えろよ。方法も分からない事を、はい、やります、って言う程、俺は馬鹿じゃねえんだよ」
『もっともだな、悪かった。きちんと説明をしよう。そもそも、悪魔とは何か？　お前はどう思っている？』
少年から目を放し、男性が尋ねた。問題を出す教師のような態度だ。
「悪魔っつーと……そうだな。漠然としてっけど、悪い奴、って感じか？」
『なるほど、なるほど。そういう点は別に変わっていないな。では、答え合わせをしてやろう。お前の答えは、全くもってはずれだ。一

文字たりとも合っていない』
言い切り、男性はやれやれ、とばかりに肩をすくめて見せた。その仕草に少年はまた眉をひそめる。悪魔とか言っておきながら、言動が全然それらしくないからだ。
「んじゃあ、何だよ？」
『悪魔とは人間の味方だ。……基本的には、な。だが、悪魔のついた宿主が悪事を働く事が多い。そうなると、悪魔が悪いとされてしまう訳だ。悪魔が宿主に何をするのか、説明しよう。……悪魔は、宿主に能力を与える』
「能力？」
『そう、能力だ。だが、これは宿主が他の悪魔の魂を頂く度にしか、与えられない。最初は別なんだがな。まずは一つだけ、お前に能力を与えてやる。有難く思え』
　男性が少年の頭に手を置いた。身構えて、数秒。男性が少年から手を離した。
「……何かしたか？」
『したとも。お前に能力を与えた』
「どんな……？」
『身体能力の上昇だ。それについていける反射神経もな。必要に迫られたら、能力も発動出来るだろう。では、今から本題に入る。悪魔に憑かれた宿主同士は引かれ合い、戦闘を繰り広げるだろう。そこで、お前は何度も死にかけるだろうが、絶対に死ぬな。俺まで消滅してしまうからな』
いいな、と少年に確認して男性は言った。確認というよりは、念押しに近いのだが。
「お前は何もしねえのかよ？」
『してやりたいが、出来ないから宿主が必要なんだ。分かれ』
「まだ、完全に信じられねえけど……」
『嫌でも現実だと分かるさ。そうそう、箱だがお前の携帯しやすい物に形を変えよう。何がいい？　アクセサリーにでもしてやるか？』

「……何で携帯せにゃならん？」
怪訝そうな顔をして少年が問うと、男性はふむ、と顎に触れた。
『お前と俺は運命共同体。ならば、常に共に居るのが道理だとは思わないのか？』
「思わねえ。見ず知らずの、悪魔、なんて言ってる野郎と一緒に居たくねえよ」
『そう言うな。勝手にお前が契約しちまったんだから仕方がないだろう。希望がないならば勝手に形を決めるぞ。――そうだな、ブレスレットにでもしてやるか』
そう言って、男性は指先を動かして何かを描くようにした。
「名前ないのって不便じゃねえの？」
『ん？　おお、そうだな……。じゃあ、暁、とでも名乗っておくか……。お前は真吾、だからシンだな。いいな、シン』
「暁、ねえ……。大仰な名前」
へっ、と鼻で笑ってやって少年――シンは欠伸を一つした。
「ん……何か眠くなってきた……。っかしーな、学校で存分に寝たつもりだったのに」
『さあ、そろそろ戻れ。ここは俺の居場所だ』
シンの頭を軽く叩き、暁が言った。え、と聞き返すと急にシンは眠くなってきた。そのまま意識が遠のいていって、そのまま深い眠りに落ちていった――。

狂った復讐の愚者　1

「訳が分からねえな……。でも、実際に箱がブレスレットになってるし」
シンは呟きながら、右腕にあったブレスレットを見た。髑髏をモチーフにした模様がついているブレスレットで、あの箱と同じく漆黒で、何なのか分からない材質だった。とりあえず外そうとして、だが、外れなかった。僅かな隙間があって動きはするが、手首に引っ掛かって外れてくれない。
「……え？　ちょ、おい」
思い切り引っ張ってみるが、右手首が痛くなってくるだけだ。それでも努力し、足でブレスレットを固定して右手を引っ張ったりするが、全然、意味がない。痛くなってくるだけだ。
「こら、暁。どうなってんだ。何とか言いやがれ」
ブレスレットを見つめてシンが言ってみた。
「……」
だが、静寂が流れただけだ。うんともすんとも言わないし、それどころか自分で空しくさえなってきてしまう。
「畜生……。絶対に信じねえ。断じて、信じてやるもんか」
自棄になりながら呟いて、シンは散らかった畳の上にごろんと寝転んだ。鞄を枕にし、目を閉じた。そのままそうしていたが、眠れそうになかった。妙に目が冴えて、意識ははっきりとしてくる。
「……何で、寝れないんだよ？」
誰に尋ねるでもなく呟いて、シンは苛立ち気味に舌打ちをした。上半身を起こして、頭をぼりぼりと掻き毟る。右手首の黒いブレスレットがやけに目に付いた。
「散歩でも行くか……」
決めると早く、制服を脱いでジーンズとシャツを着て、シンは部屋を出た。財布をヒップポケットに入れ、携帯電話を左のジーンズの

ポケットに入れる。アパートの階段を降り、一車線の道路を歩いていく。目的地はなかったが、シンはよくこうして散歩をしていた。夜になれば夜空を見て、昼ならば陽光を受けて輝く水溜りを見たりと、そういった事が何となく好きだった。十分程歩いていたら、シンの携帯が鳴った。

「もしもし」

左手で携帯を持ち、電話に出た。

『俺だが』

「ん……？　暁？」

その声にシンは怪訝な顔をして足を止めた。右手首のブレスレットを凝視して、携帯からの音を意識する。

『そうだ。シン、新聞を俺に読ませろ。買え。スポーツ紙ではないぞ。いいな？』

それだけで電話が切れ、シンは通話の切れた携帯を凝視した。着信履歴を見てみるが、残っていなかった。その現象に眉をひそめて、小首を傾げる。

「新聞……？　俺、パシリ？」

そう考え付き、露骨に面倒くさそうな、それでいて、とても嫌そうな表情を浮かべた。誰かに良いように使われるのを嫌う性分なのだ。足は目に付いたコンビニへと向かった。

「大体、健全な高校生が必要もないのに新聞なんか買うかよ」

コンビニに入り、入ってすぐのレジのすぐ近くにある新聞を見る。

「いや、絶対に買わない。金が勿体ねえっつーの」

適当に新聞を二つほどレジに持って行き、シンは自答した。金を払い、コンビニを出て新聞を広げる。

「――って、何やってんだ、俺？」

また携帯がなり、今度はディスプレイで番号を確認した。知らない番号だ。

「もしもし？」

『俺だが。新聞を読め。そうしなければ、この時代の事が俺に伝わ

ってこないのだ』
「嫌だ」
『拒否権はない。お前は俺の下僕だ。現に言葉では否定しつつも、新聞を買ってしまったではないか。それを捨てるのか？　勿体ない事をする奴だな』
暁に言われてシンは苦虫を噛み締めた顔をした。確かに今月の家計はピンチだ。なのに、買ってしまった。ならば、それを捨てるなどどんなに勿体ない事なのか。単純な損得を考えてシンは折れた。
「……分かった、読めばいいんだろ？　黙読？　音読？」
『黙読でいい。一面記事だけでいいぞ』
「なら、立ち読みで良かったじゃねえか……」
呟き、シンは新聞を広げた。《謎の通り魔殺人、死傷者ニ十人に》とされた見出しがつけられていた。シンが内容を読む限りだと、先月から通り魔が頻発し、死傷者がニ十人になったというものだ。手口は背後から襲われるというものらしかった。被害者に関連性はなく、最初は五十代の会社員、次に六歳の女児と、世間を恐怖に震撼させている。
「こんなんがどうした？」
だが、シンは現実味を感じられずに「こんなん」としか認識をしなかった。
『いや、確認に過ぎない。シン、これが起こっているのはこの周辺だな？』
「ああ……。それがどうしたんだよ？　通り魔がそんな珍しいか？」
『もういいぞ。あとは教養でも読んで身につけるんだな』
それきり暁の声はしなくなり、携帯をポケットにしまってシンはため息をついた。
「ヤな奴」
新聞を脇に挟んでシンは舌打ちをした。そのまま、また行く宛てもなく散歩を続けるのだった。

＊　＊

――彼は、復讐がしたかった。

入社して十年が経ち、職場にも慣れ、婚約までしていた。それなのに、会社が彼を解雇したのだ。理由は、人員削減。不景気のしわ寄せに遭い、彼は全てを失ってしまったのだ。職を失い、それをきっかけに婚約は解消、新築していた家も建てられなくなり、多額の借金を負った。目立ちはしないが、仕事は出来る方だった。それなのに、再就職先は見つからず、時間だけが経過していった。

そんな折だった。彼が箱と出合ったのは。住んでいたマンションを追われ、公園で眠ろうとした時に箱が彼の視界に飛び込んできたのあった。そして、箱に言われた。どんな望みも叶えてやる、と。その言葉の魔力に魅せられ、彼は宿主と化した。与えられた力に彼は狂喜し、そして狂気に陥った。まずは自分を解雇した会社の重役を殺害した。次に、目に付いた女児を殺した。次々と、彼は殺しを重ねていった。抵抗をされようとも、能力を得た彼には毛ほども邪魔にならなかった。

「今日は、あれでいい――」

狂気を孕んだ鋭い視線で、彼は高校生らしき人物を目に留めた。新聞を脇に挟み、缶のココアを片手に道を歩いている。そして、彼はポケットに手を入れて、サバイバルナイフを出して少年に向かって駆け出した――。

狂った復讐の愚者　2

「――お、百円玉見っけ」
シンが何気なくアスファルトの上を見て、しゃがんでそれを拾った。だが、それは瓶の蓋だった。
「んだよ、こんなのか……」
舌打ちをしながら立ち上がり、シンの頬を何かが掠めた。鋭い痛みが頬に走り、触れると液体が手に付着した。外灯の明かりで確認してもはっきりとは分からないが、赤い色をしていた。
「死ねぇ！」
「ぇ――？」
それは、一瞬の出来事だった。シンの脇腹に何かが刺さる。見知らぬ男がシンに密着していた。今までに感じた事のない激痛が駆け抜け、シンは膝から力が抜けていった。立っていられなくなり、その場に崩れ落ちる。
「はっ……はっ……！」
シンを刺した男の荒い息遣いが聞こえた。首を起こしてシンは革靴を視界に捉える。ナイロンのジャージのズボン。深い紺色。動く度にそれが擦れて音を立てていた。
「てめぇ……」
歯を食いしばりながらシンが手を伸ばした。ジャージのズボンを掴み、顔を持ち上げる。三十代の男性だった。手入れのされていない髭は不潔な印象を与え、脂ぎった髪の毛も汚らしい。それをはっきりと視認する。
「こ、この小僧……！」
男性がシンを蹴った。顔を思い切り蹴り上げると、シンの手が放される。虫の息でシンは仰向けになった。脇腹に刺さったナイフから夥しい出血をしていた。痛み、苦しみ、恐怖、といったものが呼吸を乱れさせ、シンから思考能力を奪っていく。そんな状態で頭に浮

かんできたのは、新聞の記事に出ていた通り魔事件の事だった。
（暁め……こうなんのを知ってやがったのか……？）
ぐっと手足に力を込め、アスファルトを押す。激痛が脇腹を迸り、動く度に血が溢れていった。それでも、シンは、立ち上がった。不思議と力が感じられて、冷静さを取り戻そうとしていた。
「何で起き上がる……？」
男がたじろいで呟いた。シンが膝に両手を突きながら何とか立ち上がった。腕の黒いブレスレットが僅かに光った気がした。それを尻目に見て、シンは漠然としながら、でも、はっきりと悟る事があった。
「あぁ、こういう事だったのか……」
ナイフを抜き、アスファルトに投げ捨てる。血が一気に溢れ、それを左手で押さえた。汗が額から流れ、否応なしにシンは自分が危険な状態にいると分かる。
「小僧……何者だ……。お前も、悪魔を……！」
赤く染まったアスファルトは、シンから流れ出た血液の水溜りによるものだ。片足を出してそれを踏みつけ、シンは男を見た。ギラギラとした目だった。
「宿主は惹かれあうんだったな……。つまり、てめぇが俺の最初の獲物、って訳だ」
長く息を吐き出しながらシンが言う。暁に知らされた訳でもなく、本当に漠然とした悟りだった。本能的な、直感。それがシンに伝えたのだ。
「獲物？　お、俺を獲物だと……？　黙れ、黙れ、黙れ、お前みたいな小僧まで俺を虚仮にするのかァ！」
男が大振りに拳を振った。シンの顔に当たり、そのままアスファルトの上に倒れた。馬乗りになって男が狂ったように喚き散らしながら握った拳を振り落とす。鈍い打音が断続的に響いて、シンはやられるがままだった。唇を切りながら、痣を作りながら、口汚く罵られながら、シンはされるがままになっていた。

「はっ……はっ……お、俺を虚仮にするから悪いんだ……。何もかも！　俺を誰一人、認めやしない！　ははっ！　そうだ、俺は悪魔に魅入られたんだ！　力を貰った！　たった一回、ナイフを突き刺すだけで心臓まで貫通させた！　はは……ははっ！　肥えた専務なんて、見物だった！　失禁をして、俺に許しを請い、金なら渡すと懇願した！　刺し殺した！　俺がだ！　復讐してやったんだ！
俺をクビにしたから罰が当たったんだ！　その次の小さい子供なんて、ナイフ見ただけで泣き出した！　止めて、オジサン、なんて言った！　だから殺した！　ははっ！　俺をオジサンなんて呼んだからだ！」
狂ったように男は叫んでいた。それを聞き流しながら、酷く虚ろな瞳をしたまま、シンがゆっくりと起き上がる。静かだが、乱れた断続的な呼吸。顔中に痣を作り、唇と口の中を切って唾と一緒に吐き出す。脇腹を左手で押さえて、男を見る。視線だけは、冷め切っていた。
「何だ……その顔は？　何で死なない？　泣け！　叫べ！　喚け！
許しを請え！　俺は悪魔だ！」
「へっへっへっ、てめぇは悪魔なんかじゃあねぇっつーの……」
小さな声でシンが言った。嘲笑するように言い、男の神経を逆撫でする。
「何だと？　もう一度言ってみろ！　その手足をバラバラにして、目玉を抉り出して、烏の餌にしてやる！」
「やってみやがれ……下衆野郎――」
シンの言葉に男が奇声を発しながら飛びかかった。だが、シンはそれを見切ってさっと横に動いて回避する。暁より授かった能力が発動されていた。目に映るものが普段よりも遅く見えて、体が軽くて力がみなぎってくる。男がアスファルトに両手足を着いて着地すると、シンにまた飛びかかった。まるでそういう移動をする動物のように俊敏な動きだ。
『シン、そのまま聞け』

突然、頭の中に暁の声がしてシンは動きを止めそうになった。だが、迫ってきた男の獣のように伸びた鋭い爪を寸での所で避ける。
『その男は悪魔の誘惑に負けた。魂の弱い人間は悪魔に憑かれると自我の崩壊を起こす事がある。それが、誘惑に負けるという事だ。思考能力が著しく低下し、誰でも燻っている怨みや嫉みといった負の感情に突き動かされる。そうなると体が人としての形を保てなくなり、異形の怪物――魔物へと化す。よく見ておけ、お前も自我を失えばああなるぞ』
暁の言葉のままに男はどんどん、人の形を失っていった。爪や牙が鋭く発達し、瞳が赤くなって血走り、骨格が変わっていく。背が丸くなり腕と足の長さが同じようになっていき、人間を獣にしたような――まさに異形といっていい怪物へと変貌していた。
「俺を……崇めろォ！」
男だった魔物が低い唸り声で叫び、とうとうシンを押し倒した。だが、シンは倒された勢いで右足を魔物の腹に当て、投げ飛ばす。アスファルトに叩きつけられた魔物がまた起き上がった。その姿をシンは直視したくなかった。哀れな姿だった。着ていた服が、盛り上がった骨や筋肉で所々破れ、全身に獣のようなごわごわした黒い毛が生えてくる。
「おい、暁……聞いてんだろ？」
僅かニ、三メートルの間を空けたままシンが言った。魔物は体勢を低くしてシンに飛びかかる機会を伺っているようだった。
「殺さなきゃ、ならないのか……？」
じりじりと後退しながらシンが尋ねる。重苦しい声だった。靴に何かが当たるのを感じ、シンが目を下に向ける。同時に魔物が飛びかかってきた。舌打ちをしながら、靴に触れたソレを拾い上げる。魔物の顔を見て、シンの表情が苦悩に満ちた。命の危険にさらされているが、それでも、他者の命を奪わなければならないのか。半端な事じゃ止まりそうもないのは分かっていた。だから――辛かった。
『殺せ。でなければ、お前も俺もここで死ぬ事になるぞ――』

非情にさえ聞こえる――いや、実際に暁は悪魔だ。人の生き死には宿主でなければ大した興味も抱かない。人間が虫の命を考えるような感覚だ。

「こんなんになるなら、最後までお前の警告を聞いておけば良かった――」

拾い上げたナイフを手に、シンが呟いた。その顔にあったのは、諦めと罪悪感。握り締めたナイフは自らの血で濡れていた。その刃を、まっすぐ向かってくる魔物に向かって突き出す。嫌な手応えがシンの右手から伝わってきた。生暖かい液体が体に降り注いでくる。強く右手にぶつかってくる衝撃は魔物の体を引き裂き、貫いていった。シンは目を瞑っていた。見られなくて、見ていられなくて、固く瞼を閉じていた。

ドサッと、落ちた。ナイフを手から落とし、シンはその場に膝から崩れた。手に残る感触は、命を奪ったもの。自分がおぞましくて、怖かった。起こった出来事を否定するようにゆっくりと首を左右に振り、頭を抱える。胸をきつく締め付ける罪悪感がすぐに彼を襲った。

「何で……俺が……」

そう、シンが小さく呟いた時だった。

「ぅ……あ……」

途切れそうな声がシンの耳に入ってきた。はっとして魔物を見ると、異形だった姿が人型に戻っていた。男が見開いた目でシンを見ていた。

「見るな……俺を見るな……。てめぇが俺を襲ったからだ……」

「ぁ……りが……と――」

およそ、もう息なんか出来ていなかったのだろう。それでも、男はそんな言葉を何とか吐き出した。その言葉にシンは耳を疑い、信じられないとばかりに目を丸くした。だが、もう、男は完全に事切れていた。唖然としながらシンが死体を見つめていると、突然、男の体が灰のように崩れ始めた。そして一際強い風が吹いて、男の死体

はそこから消えてなくなっていた。およそ、生きていた痕跡というのがなかった。男の血も、着ていたジャージの切れ端の布も、全てが灰となって風に攫われていた。

「何なんだよ……？」

訳も分からずにシンが呟く。完全に、男が消え去ってしまったのだ。にわかに信じがたいが、目の前でそれが起こり、それを認識している。たまらなく恐ろしくなり、シンは震えだした。寒さとは違う。純粋な恐怖による震えだった。

『魔物となり、その命を絶たれた者はその身を悪魔の世界の業火で焼かれ、灰となる。嫌ならば生き残れ。それが俺の望みでもあり、お前の――』

「黙れ！　黙れ、喋るな、話しかけるな！　もうこりごりだ、こんなの嫌だ……。堪えられねえよ……」

暁を遮り、シンが叫んだ。目から涙がこぼれ、頬を伝う。手に掛けた男は、多くの人を殺してはいた。でも、殺しは殺し。どんな悪党だろうとも、手に掛けたという事実がシンには重過ぎた。胸を締め付け、頭から、肩から、全て、全身に重く圧し掛かり、錘をつけた海中を歩いている気分だ。

『悩むのは結構。立ち止まるのも結構。だが、逃げ出すのはこの俺が許さん。俺を呪いたくば呪え。自身を呪いたくば呪え。運命を呪いたくば呪え。だが、尻尾を巻いて背を向け、逃走する事は許さん』

「黙れって言ってんだ！」

叫び、シンは右手首のブレスレットに気がついた。それが急に忌まわしく見えてきて、嫌悪感がみなぎる。乱暴に、それを外そうとした。だが、手首に引っ掛かって外れようとしない。目に付いたナイフを手に取り、ブレスレットに刃を立たせた。力の限りに振り落とすが、ブレスレットで刃が滑り、手首を深く傷つける。痛かった。ナイフを落とし、大粒の涙を流しながら手首を押さえる。痛みに悶える自分も、泣くしか出来ない自分も嫌だった。

『人目につく。その場を離れろ』

「嫌だ……」
『俺の言う事を聞かないのか？』
「聞くか……聞くもんか……」
『そうか、ならば強硬手段を取らせてもらうぞ――』
暁の声がシンの頭の中に響き、急に意識が遠のいた。だが、それに逆らってシンは出来上がったばかりの手首の傷に指を押し当てて痛みで意識を繋ぎとめようとする。しかし、それも無意味だった。痛みを覚えたまま、シンは暗い意識の淵に落ちていくのを、感じ取った――。

真意の見えぬ悪魔の助言

『人間というのは、つくづく不思議な生物だ。殺されかけた人間に対して、その命を奪った罪を感じてしまう。生きる為に殺したというのに、殺しが悪い、という概念に囚われ、自責の念に駆られてしまう。なぁ、シンよ、何故だと思う？』

暁に尋ねられ、シンは俯いていた顔を上げた。

――そこは暁の世界。目の前にいる暁は一人掛けのソファーに腰掛け、足を組んでシンを見ている。冷ややかな視線を浴びせながら、シンの答えをじっと待っているのだ。落ち着き払い、にたにたした笑みを顔に浮かべたままシンを見つめている。

「……それは、俺に対する不満だな？　なら、俺を宿主じゃなくしろ。そんで、新しい宿主でも探せよ……。俺はもう、お前なんかに付き合いたくない」

棒立ちしたまま、拳を固く握り締めてシンは言った。気の抜けた所もある少年だが、根っこは優しすぎるくらいに優しい性格なのだ。

『残念ながら、それは出来ない。俺はお前と契約をしてしまったからな。破棄するとなれば、俺もお前も、悪魔の世界の業火で身を焦がさねばならない。まぁ、肉体を焼く訳ではないが、精神をあれは焼き尽くすのだ。悪魔たる俺は休憩さえ取れれば――まぁ、一世紀ほどだな――回復出来るが、人間のお前は輪廻転生の輪から外れ、その魂はどこへも行けなくなってしまうんだ。それでもいいのか？』

「いい」

即答したシンを見て、少し驚いたように暁は一瞬だけ眉を吊り上げた。だが、それも一瞬ですぐに、試すように、ほぅ、と顎を撫でて関心したように呟く。

『所詮、お前が良かろうと俺はそんなの嫌だからしてやらないがな』

意地の悪い笑みを浮かべ、暁は言った。その態度にシンは固く込むしを握った――のだが、暁の一睨みで全身が硬直した。

『おぉ、なかなか血気盛んだな。もう少し、血圧は低めかと思っていたのだが……』
声を出す事も出来ず、シンは暁を睨みつける。もしも、睨んだだけで殺せるのならばどれだけいいのだろうと、本気で考える程だった。それほど、憤怒で心を燃やしていた。
『だが、シン。お前はまだまだ、若い。人間としても、悪魔の俺からしても、だ。未熟で、青くて、甘くて、笑える程にまっすぐな魂をしている。――見せ掛けはどうあれ、な』
言いながらそっと暁がやけに長い人差し指をくるりと回した。シンの体が勝手にその場で胡坐をかいて座る。じとりとした視線だけは絶やさずにシンは暁を睨みつけている。それが精一杯だった。
『だが、それでいい。泣け、喚け、騒げ、嘆け、歩め。決して立ち止まらずに、その顔は前だけを見据えて、常に先だけを見ろ。振り返るな、そして、強く願え。お前の望みを、だ。望みに対する願いが強いだけ、能力は引き出される。お前は明確な願いを持っていないからな……。それだけ、弱い』
言い切った暁だが、それに対する怒りはさほど感じていなかった。むしろ、先ほどの物言いの方がずっと頭に来ていた。もう、付き合っていられないのに、それなのに、それが出来ないもどかしさ。自分の無力さ、愚かしさ。その他、諸々に弱さを突きつけられた気がして、それがシンを苛立たせていた。
『お前の望みは何だ？　なに、実際に望みを叶えてやる時に変更は効く。現時点での望みを言ってみろ』
暁がそう言うとシンはやっと身動きが取れるようになった。
「……てめぇを殺してやりてぇよ」
ありったけの憎悪を込めてシンが言う。そうか、と満足げに暁が笑んだ。だが、その笑みには危うい邪気が感じられるような気がする。
『それもまた、いいだろう。ならば、俺を殺したいその信念で、悪魔の魂を食らえばいい――む、そういえば』
急に暁が神妙な顔をした。眉間にしわを寄せて、深いため息をつき

ながらトントントン、と自らの頭を人差し指で叩いた。
『しまったな……。魂を食らうのを忘れていた。これではお前は無意味に怪我を負った事になる。それに新たな能力も与えられない。……ふむ、俺とした事が迂闊だった』
「魂なんか食うか……」
俯いたままシンは言った。小さいが、強い意志を秘めた言葉だった。
『そんな事を言うな。願いを叶えたくはないのか？　悪魔の魂を食らい、強くなれば他の宿主どもと遭遇しても倒せる確率がぐんと高くなる。そうすれば、願いを簡単に叶えられよう』
「……」
しかし、シンは黙ったまま立ち上がった。じっと暁を見つめる。何かしてやりたいが、出来ないであろうと考える方が強くて、結果、睨むしか出来なかった。
『まぁ、話はこれで終わりにしよう。傷の療養をするがいい。それと、お前に助言だ』
「悪魔祓いの仕方でも教えてくれんのか？」
『そんなの単純に、殺せばいいだけだ。……それはそうと、助言だが――いいか、シン。お前は俗世間一般では、学生という立場にいるな？　いや、確認にもならない自身への確かめだ、返事はいらん。学生というのは、様々な面で不自由だ。だから、世間から消えろ。言い換えるなら、闇の中へ居場所を変更しろ』
細くて長い指をシンに向け、暁は言った。言葉の意味が分からず、シンは訝しい表情をする。闇の中へ居場所を変更しろ、とは、一体どういう事なのか。明かりのない場所に居ろ、という訳ではあるまい。
「……」
『狼狽しないのはお前のいい所だな。動揺は容易に自身の心理を相手に晒す事になる。基本は、ポーカーフェイス。俺のように、どっしりと構えている事だ。……少し、褒めすぎたか。まぁ、いいだろう。今から、俺がお前に行き先を教えてやるから、そこへ向かえ。

そうそう、家族や友人、知り合いに挨拶などするんじゃないぞ？
一切、何の手がかりも残さずに。存在が消えたかの如く、お前は闇の世界へ入るのだ』
「闇の……世界？」
『そうだ。お前の想像もつかない、日々命がけの銃撃戦を行っているような世界だ。無論、同じ星の上に成り立ちはするがな。一般人とは隔絶された世界だ』
暁が言いながら、シンにどこか裏のある笑顔を向けた。
「……」
『俺がお前に指示を出してやるから、それに従え。いいな？　返事はいらん。俺の言う事だけをずっとお前は聞いていろ――』
唐突にシンは眠気に襲われて、そのまま意識を失ってしまった――。

日常に潜む悪魔の恐怖

「――おい、真吾！　顔色悪いぞ、大丈夫か？」
登校してきた直後、シンは級友にそう言われて、顔をしかめた。昨夜の傷は癒えていないが、それを制服の下に隠したまま登校したのだ。動く度に右脇腹が痛み、息が上がる。無理をする理由がシン自身にもよく分からなかったが、何でか来てしまった。
「……ダメ」
「ダメって言える内は大丈夫か」
「……んじゃあ、大丈夫にしといてやるよ」
仕方ねぇ、と呟いてからシンは机に突っ伏す。脇腹を左手で押さえて鞄に顔を埋めた。すると、携帯がポケットの中で震えだす。
「もしもし」
『俺だ』
「……何の用だ？」
暁だった。顔をしかめて、腕のブレスレットを見る。
『何故、学校なぞへ行く？』
「学生だからだ」
『それがどう転ぶかは分からないぞ？　宿主同士は惹かれあい、場所を選ばずに激戦を繰り広げる事がある。もしも、それが今起きたら一体どうするつもりなんだ？』
「……起きねえ」
『絶対にか？』
「当たり前だ。そんな事が日常的に起きてたまるか」
言い切り、シンはワイシャツの上から右脇腹に当てている左手に、何か生暖かいものを感じた。顔をしかめて、周囲を窺う。気付かれてはいないらしい。
『そうか、お前は甘いな』
「……んだと？」

『まだ分かっていないんだ。願いを叶える為になら、時も場所も選びはしない。それが顔見知りを相手にしようとも、一般人を巻き込もうとも』
「まるで、俺の周りに居るみたいな言い方だな」
『何時、何処で、何が起きるか分かりはしないぞ。油断大敵、と人間は言うのだろう？』
「……ふん、知るか」
携帯を切り、シンはブレザーの前をきちんと閉めて教室から出て行った。
「おい、影宮。どこ行く？」
教室から出ると同時に始業のチャイムが鳴って、担任教師がシンの肩を掴んだ。まだ若いが、どこか冷めた感じのある男性教師だ。
「……気分悪いんで保健室にでも」
「生憎、今日は保健の先生が出張だ。教室に居ろ」
強く言われてシンは舌打ちをして自分の席へと着いた。
「真吾、顔色本当に悪いぞ？」
「さっき、ダメだって言ったろ……」
級友に苛々しながら言い返し、シンは脇腹を押さえたまま椅子に深く座り込んだ。
「……何が、悪魔だ――」
呟きは誰にも聞かれぬまま、雑音に掻き消されていった――。

「――い！　おい、真吾！？」
揺り動かされて、シンはうっすらを目を開けた。いつの間にか眠ってしまったらしく、隣に座る級友が叫んでいた。
「んだよ……」
「お前、血！　どしたんだよ！？」
「血――？」
はっとして、シンは脇腹にずっと当てていた左手を見た。真っ赤に染まり、さらに乾いていた。指と指が血でくっ付いていた。

「真吾……何でそんな傷があんだよ！？」
「……何でもねぇよ……」
周囲を見て、シンはとある事に気付いた。生徒が居ない。この級友――中田郁郎だけが居た。
「移動教室なんか今日はねぇぞ……？　全員、どこに行ったんだ？」
時計を見て、針がまだ昼前を差しているのを見た。本来なら、担任教師――倉田の英語の授業のはずだ。
「……授業変更で体育に――」
「違う。それなら、どうして着替えた跡がどこにもねぇ？　男どもはいつも、制服を脱ぎ散らかしてんだろが」
シンは言いながら、ある考えが急速に固まっていくのを感じていた。
「中田……お前、皆をどうしたんだ……？」
椅子から立ち上がり、中田から離れてシンが言った。黙ったまま、中田が口元をいびつに歪めた。
「お前って炯眼凄いよな？　いつも、そうだ。今日はアイツが不機嫌だ、今日は倉田が抜き打ちテストをやる、って……。お前はそういうの見透かすのが得意だよな……」
心臓が高鳴って、シンは中田からたじろいで下がった。不吉な予感がシンに渦巻いていく。
「まさか、お前……」
「感覚で分かるぜ？　お前も、宿主だろ――？」
突然、中田が机を蹴った。それがシンに当たり、ふらついていたシンを倒す。筆箱からカッターを取り出して、中田がシンへと襲い掛かった。
「ッ！」
倒れてきた机を蹴って、シンが起き上がった。中田を足止めさせ、手近にあった椅子を掴んで投げつける。
「喧嘩なんかより、よっぽど楽しいぜ。しかも、勝てば勝つだけ、何だって願いを叶えてくれるんだぜ？　魂ってのもなかなか美味しそうだしなァ」

椅子を簡単に払いのけて、中田が言った。カッターの刃を舌で舐め、狂気をチラつかせた瞳でシンを見る。
「……何で、こうなんだよ……」
忌々しく言って、シンがブレザーを脱いだ。シャツは赤く滲んでいた。
「いいから、魂食わせろォ！」
椅子を片手で投げて中田が言った。片腕で防ぐと、中田が机をさらにシンへ投げつける。机の脚がシンの頭にぶつかった。鈍痛がして倒れ込むと、また中田が椅子を振りかぶる。今度はもろに腹部へ食らって、シンは押し殺した悲鳴を上げた。
「畜生が……。何で、こうなんだ……」
カッターを振り落としてくる中田を見てシンが呟く。悔しげに顔を歪めて固く目を閉じた。
「――ってぇ！　誰だ！？」
そんな声がし、シンは目を開けた。中田がカッターを持っていた右手を押さえていた。状況が飲み込めず、シンは周囲を見る。そして――見つけた。教室の入り口の引き戸の所に倉田が立っていた。いつもの冷めた表情をしていて、中田を見つめている。
「……倉田が何で居やがる！」
「私はこのクラスの担任だ。教室に居て何が悪い？」
そう言って倉田が教室に入って来る。倉田は落ち着いていた。普通の人間ならば、取り乱すんじゃないかとシンは思い、また嫌な予感を感じる。
（もしかして……倉田も悪魔に……？）
何かを倉田がしたのかも分からなかったが、シンはこの予感は外れないと妙な確信を持っていた。
「授業のはずだ！　俺が真吾を連れてくるって抜け出したのに、どうしてお前まで居る！？」
「わざわざ、移動する時に起こそうとしなかったお前の行動が不審に思えた。それに、中田郁郎。お前は基本的に面倒臭がりやのはず

だ。なのに何故、自分から起こしに行った？　受け持つ生徒の事すら私が知らないと思っていたのか？」
シンの方へ歩み寄り、倉田が手を差し出した。それに敵意を感じず、シンはその手を借りて立ち上がる。息は乱れ、頭と脇腹が痛んでいた。
「先生、そんなに出しゃばるならお前も殺してやるよ――！」
がむしゃらに中田が机を蹴り飛ばした。しかし、倉田がふんとつまらなそうに鼻を鳴らすと蹴り飛ばしたはずの机が中田に襲い掛かる。さながら手品師のマジックの如く宙を浮いて中田にぶつかったのだ。さらに、机の上に出ていたシャープペンが中田目掛けて飛ぶ。訳が分からずにシンが呆然と見ていると、中田が何か叫びながら襲い来る文房具や机の中から倉田に突進して行った。大振りに拳を振るうが、倉田はしゃがんでそれを避け、足払いをして中田を転ばせる。そのまま倉田の靴が中田の顔を踏みつけた。
「クソ、クソ、クソ！　どうしてお前なんかにィ！」
能力による脅威の力で中田が起き上がろうとした。しかし、シャープペンが中田の制服を貫いて床に突き刺さり、身動きを封じてしまう。
「一日の長、という言葉を肝に銘じておけ――」
圧倒的な倉田の勝利にシンは頭が白くなっていた。今、まさに宿主同士の戦いが行われて、シンの予感した倉田も宿主というのも的中したのだ。
「宿主……」
シンが激しい動悸を抑えようとしながら、倉田が後ずさった。何が起こるか分からなくて、怖かった。中田が激しく暴れているが、椅子の足が中田を拘束するように床へ刺さり、無意味になっている。
「影宮真吾。私はお前と敵対するつもりはない」
「信じられるかよ……。悪魔に憑かれてるのに……」
「もっともだが、それはお前とて同じ事だ。私を信じろ」
その言葉でシンは足を止め、まっすぐ倉田を見た。すると、倉田が

手招きをする。
「私も宿主だ。だが、正当防衛以外で能力を使わない事にしている。私の能力は念動力――サイコキネシスというものだ。触れずに物体を動かせるというものだ。便利だろう？」
騒がしく叫ぶ中田の口にチョークが束になって突っ込まれた。倉田の念動力によるものだ。中田は叫べなくなるが、手足をばたつかせている。
「あんたは……ソイツをどうすんだ？」
「中田郁郎の事か？　……無論、後で魂を頂く。悪魔の魂だけを食えば、それまでの記憶は消えるから元に戻れるだろう。宿主ごと殺そうとも魂は食らえるがな」
冷ややかな口調。だが、シンの警戒心は次第に薄れていった。
「授業は……どうなってんだ？　皆、どこに行ってんだよ？　てっきり、中田に……」
「案ずる事はない。生徒は無事だ。お前を除いて、全員、セミナー室に居る。今朝のホームルームを聞いていなかったんだろう？」
「……聞けるかよ……」
痛む頭に触れ、シンは何か液体が手につくのを感じた。げんなりと顔をしかめ、手を見れば赤い液体――血だ。血を見てしまったから、余計に痛みが酷くなった気がしてきた。
「早退をしろ。許可してやる。そして、夜に私がお前の家へ向かう」
「何しに来るんだよ？」
「お前の退学手続きをしてやる」
「――――はぁ？」
素っ頓狂な声を上げて、シンは倉田を見つめるのだった――。

自宅訪問 ― 教師と謎の男　1

二回のノックがされ、シンはのろのろと扉を開けた。そこに居た担任教師、倉田を見て無言のままに中へ招き入れる。倉田は私服だった。――と、いってもジーンズにストライプのワイシャツ、それにジャケットといった格好で、学校での姿と大した変化を見られないが。首にないネクタイだけが少しだけ印象を変えさせる。

「……で、退学手続きってどういう事ですか？」

妙に突っかかる口調でシンは問うた。何故、退学させられるかが不明だった。

「辞めた方がお前の為だと思った。私も教師など辞める」

「は？　何でだよ？」

その意図が分からずシンは怪訝な顔をする。

「闇に居るべき存在なのだ、宿主は」

「……？」

「不必要に他人を巻き込む必要はない。いや、巻き込んでは何より面倒だ。生きる、死ぬ、といった事の前に、隠すというのが何よりも面倒だと思わないのか？　お前は今日、怪我をしてまで学校へ来た。朝の段階で気付けなかった私にも非があるだろう。しかし、周囲に何事もないように振舞うのは精神的にも辛い。だとすれば、そういった事を隠さなくとも必要のない世界――つまり、闇にいるのが得策だ。私はそう思った。反論は？」

黙ったままシンは顔を伏せた。何も考えられなかった。ただ、疑問が沸いてきて、それを口にした。

「……宿主には、何時？」

「私か？　私はつい半年ほど前だ。夜、職員室で一人、仕事をしていたら私の机の上にいつの間にか箱が置いてあった。そこで契約をし、以来私は宿主だ。これまでに悪魔の魂は二つ口にした。一つは魔物と化した哀れな女。そして、中田郁郎。……女の方は手にかけ

たが、中田郁郎は明日から何事もなく、また登校して来るだろう。恐らく、今日の事も覚えていまい」
倉田が言いながら、雑多に物が散らかる部屋の中を見渡した。
「あんたは、どうして宿主になって平気なんだよ？　中田みてぇに狂っちまったみたいでもないのに……」
「分別を弁えているだけだ。願いが叶うなどと本気で思ってはいないからな。降掛かる火の粉は払う。そして、消え入りそうな火ならば、風除けになる。――それが生徒ならば、尚更」
冷たい教師だと、シンは今の今まで倉田をそう思っていた。生徒に大した感情も抱かず、仕事として相手をしているのだと、そう思っていた。なのに、相変わらず冷静さを欠かずに連ねる倉田の言葉をシンは真に受けられた。不思議と、信じられた。
「……それで、闇って何だよ？」
「詳しい事は知らぬ。だが、何時までも一般人としての生活をするのは面倒極まりない。念動力などという能力だ。座ったままにほぼ全ての事を出来る。それを一々、手を動かし、足を動かしてやるのはどう考えようとも愚かだ。ならば、それが普通の世界。宿主で溢れる世界に居ればいい」
「知らなくて、どうすんだよ？　言い草からして、闇に入るんだろ？　なら、知らなくてどうやって入る？」
「臭う場所へ向かえばいい」
「臭う……場所？」
聞き返すと倉田が急に立ち上がった。それから足音を立てないように玄関のドアへ向かい、扉に耳を当てる。そんな行動を見ながら、シンは困惑した。何をしているのか分からない。しかも、真顔だから余計だ。
「……誰かが居る。私が念の為に仕掛けておいた罠に引っ掛かったらしい」
「罠？」
「視認しにくいピアノ線を浮かべて、幾重にもして周囲に張り巡ら

せておいた。それに引っ掛かっている者がいるのだ。このアパートは大家とお前以外に住んでいないし、来客なんかほとんどないはず。ならばこれは、宿主だと疑うべきだ」
倉田の推理にシンは生唾を飲んだ。息を殺し、自分も周囲の音を注意深く聞く。階段を上がってくる僅かな音。わざと音を立てないようにしているのだろう。こうして静かにしてないと聞き逃すくらいの音だ。意図的に音を小さくしているのなら、どうしても不吉な予感が沸いてくる。
「どうするんだよ……先生」
「離れろ」
倉田がシンと一緒に玄関から離れた。そして、念動力で家具を動かして玄関に集める。音もなく家具を積み重ねて、バリケードを作り上げた。念動力の便利さを目の当たりにしながらシンは、足音の主を待った。
「すみません、影宮さん。宅配便ですー」
ドアがノックされ、そんな声がした。ほっとシンが胸を撫で下ろした直後、倉田がシンの後ろ襟を掴んで止めた。
「んだよ？」
押し殺した声でシンが問う。
「鏡を見ろ」
「鏡？」
倉田が宙に浮かせている鏡を指差した。鏡には、別の位置に設置された鏡が映っていた。それはドアの外を見せていて、宅配業者の格好などしていない若い男の姿を映していた。当然のように荷物らしい物は持っておらず、その代わり手には自動小銃があった。背筋に冷たい物を感じ、シンは息を呑む。
「用心をしていて良かっただろう。……しかし、向こうは銃を持っているな」
「サイコキネシスで弾丸止めちゃうとかは？」
「高速で動く物体を止められる程の力はない。まして、引き金を引

くと同時に撃ちだされれば、その瞬間に死ぬ。外に武器になるような物も把握していないから動かせぬ」
「んじゃあ、どうすんすか？　都合良く、居留守に引っ掛かるなんて事にならないだろうし――」
「留守ですかー？　……出直すか」
足音が遠ざかっていき、鏡から人の姿が消えた。言葉を失くして、二人は何とも言えなくなる。都合が良いと言ったばかりなので、気が抜けない上に、でもあの雰囲気からは本気で出直したんじゃないかと思える。
「……鏡で、先見えないの？」
「もう鏡がない。この微妙な角度を全部、調節するのは難しいんだ。これ以上は増やせぬ」
とりあえず窓から外を伺い、シンは誰もいないのを確認した。腰を下ろして、髪の毛をぐしゃぐしゃと掻き回す。
「んー……もう、疲れた……。退学でも何でもしてやるよ……。あ、そだ。家に連絡くらいしねぇとなぁ……。んー、でも、行方暗ませないとダメか……？　どうなんすか、そういう所って」
シンが尋ねると倉田は少し考えてから眉をひそめた。
「そうだな……。こうしよう、お前は死ね」
「……え？」言われてシンは眉間にしわを寄せ、唖然としながら倉田を見つめた。「それは……あの、あれだよな？　よく漫画とかにある……死んだつもりっつーか……な？」
「死んだつもりで行方を暗ましてどうする？」
「んじゃ、マジで死ねってか！？　この人殺し！　殺人教師！」
シンが喚くと、倉田が散らかっていた空き缶をぶつけた。
「痛っ」
「騒ぐな。静かにしろ」
悪態をつこうとするが、シンは一応止めておいた。
「いいか、とにかく今日はお前の今後の身の振り方だ。居場所は俺が見つけてやる。お前は死ね」

「だから、死ぬってどういう事だ？」
「戸籍上、死んだ事にすればいい」
「はぁ？」
訳が分からないまま、シンは倉田を凝視する。
「何かの事故に巻き込まれ、そのまま行方を暗ませればどうなると思う？」
「……死んだって思われる？」
「それだ。それを使う。だが、都合良く事件など――」
呟いて、シンと倉田はある事に気付いた。先ほどの謎の訪問者。彼を利用して、事を大きくすれば――。
「先生、銃に勝てると思う？」
「やってみなければ分からないが――二対一なら、或いは」
よっしゃ、とシンが息を吐きながら立ち上がった。能力を使って、玄関の扉を拳でぶち破る。二階にあるシンの部屋。その部屋の前は壁がなく、ほとんど人通りのない道に向かっている。破壊音に気付いて、先ほどの謎の男が振り向いた。
「んじゃあ、先生。いっちょ、やりますか」
手摺から飛び降りてシンが言った。能力で強化された肉体は二、三メートルの高さから降りても平気だ。
「……援護をしてやる。お前は突っ込め」
倉田が周囲にある物を見回して状況把握をしながら言う。了解、とシンが答えると、謎の男がシンに銃口を向けた――。

自宅訪問 ― 教師と謎の男　2

――いつの日か、忘れていた。
ずっと昔のような感じもするが、つい最近だった気もする。あやふやな記憶は、その後の強烈な印象で連なった日々によって淡く塗潰され、もう思い出す事が困難になっていた。はっきりと覚えているのは、悪魔の囁き。『さあ、全てを壊す時が来たんだ――』。その言葉だけを頭に、心に刻み込み、気付けば闇の中に身を置いていた。
とある、組織に属している。何をしている組織なのか、未だに分かってはいない。ただ、自分に与えられたスリルに満ち溢れる任務をこなしているのだ。敵対組織の壊滅だったり、情報入手の為の他の組織への潜入だったり、基地へと乗り込んでくる敵対組織の構成員の撃退だったりと、多種多様な任務だ。宿主だらけ、という訳でもなかったが宿主とは何度か会った。刺激的で、熱狂的で、どんなゲームよりずっと興奮し、それに飽く事はなかった。
「おい、そこの似非宅配業者」
黒髪、痩身の少年が言ってきた。彼は少年の顔を見て、ポケットから出した写真と見比べる。写真にあった同じ顔に、楽しげに口元を歪めた。少年の言った言葉は右の耳から左の耳へと抜けてしまい、何と言ったのかは気に留められなかった。
「影宮真吾、高校二年、男、本籍神奈川県、黒髪、痩身――」
次々と彼が単語を連ねていき、少年――シンはぎょっとした。何故、こんなにも知られているのか、それが不思議に思えてならなかった。
「これより、抹殺する……！」
言って、彼が懐から拳銃を抜いた。黒光りするそれはコンバットマグナムとされるリボルバーだ。すでにリロードは終えている状態だった。何かあれば、即座に撃てるように。それが組織の教えであり、忠実に守ってきていた事だった。彼が銃口をシンへ向けて、引き金を引く。刹那、銃口の前に鉢植えが――しかも、土の入っているも

のが現れて砕け散った。勿論、銃弾によってだ。砕けた鉢植えの欠片を浴び、彼はアスファルトの上を自ら転がった。直後、彼の居た場所に鉢植えの欠片が次々と突き刺さっていった。
「こいつ、慣れてやがる……！」
シンが忌々しく呟き、起き上がった彼へ大振りにパンチをした。固く右の拳を握った、全力のパンチ。だが、彼はそれを見切ると左手でシンの右腕を外側へ押して、軌道を逸らす。がら空きになったシンの胴体へ強烈な前蹴りが入った。
「っ！」
蹴り倒され、さらに彼の向けるコンバットマグナムにシンは戦慄を覚えた。だが、彼の手首に握り拳より少し小さいくらいの石ころがぶつかった。思いがけぬ痛みと衝撃に彼の手からコンバットマグナムが零れ落ちると、それがふわりと浮いて五メートル程離れた場所にいた倉田の手の中へ収まった。
「形勢逆転だ、どうする？」
コンバットマグナムを彼へ向けて倉田が問うた。シンが起き上がり、彼から離れる。鈍痛と相まって、それまでの命のやりとりが早い心臓の鼓動で恐ろしく感じられていた。
「倉田総司、高校英語教師、男、本籍東京都、黒髪、長身。能力は念動力に身体能力向上――」
彼が口元をいびつに歪めながら呟く。シンだけでなく、倉田までをも知っている。これには無表情だった倉田も訝しい顔をした。
「何故、個人情報をそれほどに知っている？」
「抹殺する」
問いには答えず、彼がアスファルトを蹴って駆け出した。消えたかのような速いスピードにシンが目を見張ると、倉田が舌打ちをしながらシンの前に出た。上着の内ポケットから刃渡り五センチにも満たない短いナイフを出し、彼へ向かって突き出す。しかし、それを脅威の反射神経で彼は見切った。半歩後ろへ跳び、足を折り曲げてから低い体勢になって前へ飛び出す。一瞬のそれは、目が追いつか

なかった倉田からしたら、何が起こっているのか全然分からなかった。ただ、結果が――彼の打ち出した拳が鳩尾へ叩き込まれて息苦しくなった事が分かっただけだった。
「かっ……！」
「先生！？」
シンが叫ぶが、彼の首が動いてシンを見据えた瞬間に動きが止まった。無意識に止まったのではなく、急にぴたりと動きが止まってしまったのだ。まるで暁にやられた時のような感覚だった。彼がシンへ向かって、体中を使って大きなモーションをしながら、下方向からの特異な回し蹴りを放つ。首にそれをまともに受けて、シンは軽々と吹き飛んだ。アパートの塀にぶつかり、ブロック塀を壊して意識が遠くなる。体中に強烈な痛みを感じていた。彼が倉田が落としたコンバットマグナムを拾い上げてシンへ向けた。
「久しぶりに危なかったけど、これで終わり――」
銃声が響いて、シンが目を固く閉じた。しかし、心臓を射抜くように聞こえた銃声以降、何も感じない。感じると言えば、先ほどからの鈍痛と恐怖だけだ。十秒にも満たない時間か、十数秒程か、数十秒も、何分もしたのか時間の感覚は分からなかったが、ゆっくりとシンは瞼を押し上げた。
「キョウ、貴方は何故、任務全てを抹殺にしてしまうの？」
シンの目の前に見知らぬ女性がいた。彼女がキョウと呼んだ彼の前に立ちはだかっていて、シンとキョウの間で壁になっている状態だ。その光景はまるで、シンを女性が庇っているかのような絵だった。
「その方が楽しい」
そう答えたキョウの頬に、女性のビンタが炸裂した。目を見張るシン。だが、キョウはビンタされた左の頬を押さえて、難しい顔をしながら女性を見る。不満そうな顔は、罰の悪い子供のような表情だった。
「貴方は先に帰りなさい」
「任務は？」

「私が引き継げば問題はないわ」
「……分かった」
つまらなそうに返事をして、キョウが不貞腐れた様子で歩いていってしまう。その様子にシンは口も利けなかったが、やがて倉田の事を思い出してそっちを振り向いた。苦しそうな表情をしながら、倉田は起き上がっている所だった。シンも起き上がると、女性が二人を見た。
「はじめまして、倉田総司さん。それに、影宮真吾さん」
「先ほどの会話からすると、あの男と何かしらの関係があるようだが、どのような関係だ？」
倉田が油断なく、周囲の使えそうなものを見渡しながら尋ねた。
「それはまだ言えません。ただ、私は貴方たちに危害を加えるつもりはありません。――そちらが何もしなければ」
女性が付け足した言葉に倉田は発動しかけていた念動力の能力を止めた。
「私のコードネームはサラ。先ほどの彼はキョウ。単刀直入に言います。貴方たちを、本当は影宮さんだけの予定でしたが、倉田さん、貴方も。私たちの組織にスカウトしに来ました。キョウはとても血の気が多く、全ての任務を抹殺としてしまっているので、あのような事になってしまいました」
「組織……？」
シンが眉をひそめた。
「詳しい事は話せません。しかし、貴方たちが宿主としての身の振りをもし、考えていたのなら私たちの組織へ入る事をお勧めします。明日、同じ時間にこちらへ伺いますので、今晩はよく考えて――」
「いや、今すぐにでも入ろう」
倉田の言葉に、シンが凝視した。即決かよ、とツッコミたくなったが、雰囲気を感じ取って止めておいた。
「いいのですか？　お勧めはしますが、荊の道――いや、一寸先は闇の世界ですよ」

「そのつもりでいた。願ってもない話だ。影宮、お前はどうする？」
倉田に尋ねられて、シンは髪の毛をポリポリとかいた。こんなに唐突な事態になるとは思ってもいなかったのだ。しかも、決断はこの場。どうなるか分からないのなら怖いが、そうしなければ場所を選ばずに戦う破目になるだろうと考えると、この組織へ加入するのが正解のような気もする。
「……分かった、俺もついてく」
苦渋の選択だった。不安がシンの心境を大きく占めている。
「そうですか、分かりました。では、行きましょう」
サラが言って、二人を先導するように歩き出す。
それに倉田が続いて、シンは暮らしてきたアパートを数秒見つめてから、暗い夜闇へと足を踏み出した――。

夜光ー闇夜街

「――何だ、こりゃあ……？」
地下へと深く降りていくエレベーターの中でシンは呟いた。壁がない、むき出しのそこから見える眼下は、まるで小さな街だった。明かりはほとんどなくて薄暗いが、大きなドーム型の空間に建物が立ち並んでいる。普通の住宅のような一軒家、アパートやマンションのような集合住宅。碁盤の網の目のようにきちんと区分けされているのが、エレベーターの眺めから分かった。
「ここが闇の世界における最強組織の基地。闇夜街です」
「闇夜街……」
サラの言葉を反復しながら、シンが街を見下ろす。やがてエレベーターが止まると、柵だけの扉が開いた。エレベーターを降りてから頭上を見ると、真っ暗で天井がどこまであるのか見えない。何百メートルも降りているのが、エレベーターに乗っていた時間の感覚で分かる程度だった。
「なあ、先生……。これって、夢か何か？」
「さあな。少なくとも、私は幻を見ているつもりはない」
倉田が返し、歩き出したサラの後ろについていく。少しも驚くことなく、倉田は状況を呑み込んでいるように見えた。一方のシンはついていくのが精一杯で、何だか頭が混乱しそうな気さえする。
「待ってっての」
小走りになって倉田を追いかけ、シンは歩いていく。街に人影はほとんどなかった。時折人を見かけるが、誰も彼もこちらに大して興味を示すことがなかった。脇を通り過ぎても少しも視界に入っていないかのように、すれ違うだけだ。何だか不思議に思いながら、シンは街を見ながら歩いていく。建物は地上のそれと変わらないが、どうにも静まり返った雰囲気をしていた。
「ここは、我らの組織の本拠地であると共に、組織の人間の住ま

う土地でもあります。一人一人に家が与えられ、そこに住みます。あなた達にも与えられます。組織の人間といえども、戦闘員ではない者もいます。そういった者は街の管理や、戦闘に直接関係のない仕事をして生計を得ることになります。そういった者を戦闘員と区別して、守人と呼びますが、戦闘員と守人に上下関係はありません。何故なら、守人がいなければこの街は機能しなくなるから」

「つまり、守人がいなければあらゆる町の機能が麻痺をする。守人とは文字通り、町を守る者。戦闘などの前線に赴くことはないが、後方支援を主として活動をしている。そういう解釈でも構わないだろうか？」

倉田がサラの説明に対して言うと、彼女はこくりと頷いた。正直、シンはいまいちよく分かっていなかった。

「そして、我らが組織には二人の司令がいます。戦闘員を率いる、第一の司令・紅。そして、守人を率いる第二の司令・蒼。この二人が、我らの大将です。今から、紅司令に謁見をしに行きます。くれぐれも、粗相のないように。特に、影宮真吾さん」

特に、とまで付けられて言われ、シンは眉をひそめた。だが、粗相と言われてもきちんとした態度というのがどういうことをしていればいいのか、いまいち分からない。難しい顔をしながら一応頷いておいた。

それからしばらく、何も喋らずに歩き続けた。道はひたすらまっすぐで、エレベーターを降りてから一度も曲がることはなかった。やがて、先に立派なお屋敷のような建物が見えてくる。趣のある、古風な洋館だ。ご丁寧に外門まであり、そこでやっと立ち止まる。

「開けてくれ。コード・３９。サラだ」

門に向かってサラが言うと、一人でに鉄製の門が開く。それに口笛を吹いて驚きを表しながら、シンは再び歩き出したサラに続いた。

「すげぇな、これ……」

「闇、とやらがいかに危険なのか、知れるものだな」

呟いたシンに倉田小さくが呟いた。

「え？」
「いずれ分かる。今は、紅とやらに会うのが先だ」
適当にはぐらかされた気がし、シンは小首を傾げた。だが、洋館の扉が開けられたのを見ると、そんなことはすぐに頭の中から消え去った。
　扉をくぐると、そこは雰囲気のある広い玄関ホールだった。蝋燭の灯った豪華なシャンデリア。床には赤い絨毯が敷かれ、壁には甲冑やら、骨董品であろう古い武器などがあった。玄関ホールは二階まで吹き抜けになっていて、螺旋状の階段がある。両脇に扉があったが、サラが階段を上がったのでそれに続いた。
「……」
屋敷の中を見渡しながらシンは歩く。初めて見るシャンデリアを眺めながら階段を上がっていると、階段に躓いた。
「おっ？」
間抜けな声を上げながらシンが転びそうになると、壁際にあった甲冑が飛んできて体を支えてくれた。無機質な甲冑の冷たさを感じ、それから倉田を見る。
「余所見をするな」
「先生、助けてくれたの？」
「そうだ」
倉田が答えると甲冑が元の位置にふわりと飛んでいった。便利な能力を羨ましく思いながら、シンは再び歩き出したサラに続いた。
　「ここに紅司令はいらっしゃる。中へ」
一番奥にあった扉の前でサラが立ち止まり、二人に言った。
「……あんた来ないの？」
シンが尋ねるとサラが無言で頷く。
「守人、なのだろう？」
「えっ……？」
倉田の言葉にシンが声を上げた。そしてサラを見ると、彼女は少し俯いたようにしながら目を伏せていた。否定しないということが、

肯定に繋がった。どうして分かったのかと倉田に問おうとしたが、さっさと倉田が扉を開けて中へ入ってしまう。その後ろに続き、シンは扉を閉めた。その時に、サラが深く頭を下げているのを見たが、本当に一瞬でそれを疑問に思った頃には部屋にいた紅が口を開いていた。

「第一の司令。紅だ」

扉に背を向け、シンが前を見る。立派なオークの机に男性が座っていた。年は四十代くらいだろうか。目尻にしわがあり、髪の毛にも白髪が少し混じっている。だが、若く見えた。臙脂色をした革製の服に身を包んでいて、強い眼光をしていた。

「倉田総司。……私たちがスカウトされた旨を、まずは聞きたい」

平生と変わることなく喋る倉田を見て、シンは何故だか心強く思った。

「我々の組織の名を聞いたかね？」

「基地の名前なら聞いたぜ。闇夜街――まんまの名前なんだな」

今度はシンが言い、一つだけある小窓から外を見る。外、とは言っても地下にある闇夜街の景色なのだが。

「ここは常夜の世界だ。闇の組織最強。これが我々の自負であり、そしてそれを見事に表しているのがこの闇夜街。闇にある街は、地上のそれと変わりはしない。だが、その中身は全くの別物だ。街に住む全員が、何かしらの仕事を受け持っている。物資の流通、エネルギーの確保、情報の管理、挙げればきりがない。そして、その恩恵を受けるのは戦闘員。宿主もいるが、数が少ない。多くが一般戦闘員。宿主と戦えばまず負けるだろう。だから、我々は宿主を常に求めている。出来るならば、素質がある者を。影宮真吾くん、君の行動は三日前から監視させてもらっていた。夜、君は魔物に襲われただろう？　それが何故、表ざたにならなかったと思う？　我々が後始末をした。情報の隠蔽、という名の。そしてキョウを向かわせたが、あの坊やはどうにも抹殺衝動があるらしくて君の実力を探り、相応の力を示したならばスカウトをするようにとの命令を下したの

に、そうしなかった。そして、倉田総司さん。あなたは影宮真吾くんの監視をしている所で見つかった。随分と能力を使いこなしているようで、急遽、スカウトの為に情報収集を始めた所だった」
「早い話」
静かに倉田が口を挟んだ。
「……」
黙ったまま倉田を見るシン。
「私たちが宿主で、それなりに能力を使っているから。――という理由で、問題はないでしょうか？」
「その通りだ。そして、君たちはスカウトに同意をした。――我らが組織は夜光。衣食住、その他、医療設備から何から何まで、全て闇夜街には揃っている。これより、君たちは我らの仲間だ。掟を守ってくれさえすれば、夜光は全てに応える」
早口に紅が言い、二人の方に歩み寄ってきた。近くに来られて、急にシンは息苦しさを覚える。何か、とてもなく重いものが圧し掛かってきている感覚がし、紅から目を離せなくなる。はっきりと、悟る。――勝てない、と。争うような理由はどこにもないし、そんなつもりも全くない。だが、紅と戦い合ったら死ぬ、とはっきり意識した。
「掟、一。闇では全てを失くしたものとし、上にあった全ての関わりを断つこと。掟、二。任務の遂行は何事よりも重視するものとするが、命を投げ打つことは禁ずる。掟、三。裏切り者には絶対制裁を。異常の掟を守ってくれれば、後は自由だ。ちょっとした規則など、細かいことを私はとやかく言うつもりはない。そうそう、闇で本名を名乗るのは危険だ。コードネームをつけるのが原則だが、希望があるか？」
「シン」
即答するシン。だが、意識してはいなかった。気付いたら口が動き、声を発していたのだ。それが暁の仕業と知るのは、携帯に入ってきたメールを後で見た時だ。

「いいだろう。君は今からシン、だ。君の家はここから南、あのマンションの空き部屋のどこかを好きに使ってくれればいい」
紅がシンの肩を軽く叩き、それから倉田に目をやった。
「……希望は、ない」
「そうか。ならば私が君にコードネームをつけよう。そうだな……鋭。それが君の名だ。鋭い洞察力、観察眼があると報告を受けていた。だから、君には鋭い、という文字から鋭だ」
「良かろう」
素っ気なく答え、倉田――鋭が踵を返した。扉に手をかけ、足を止める。
「シンの隣に俺は住まう」
「好きにしたまえ。ここではある程度の自由が与えられる」
鋭が扉を開け放って部屋を出ていく。その威風堂々とした態度にシンは何だか言葉を失っていた。今までは担任の嫌味な教師、という印象しかなかったのに、ここへ来てからは随分と格好良く見えた。
「……なぁ、オッサン」
開け放たれた扉を見つめながらシンが声を出す。
「何かね？」
「……腹減ったんだけど」
「マンションへ行く途中に、レストランがある。全て、無料だ。そこで食べるといい。私のお勧めは、特製ミートソースのスパゲティーだ」
ありがと、と素っ気なく言ってからシンは紅を振り向いた。笑みを見せてから、鋭の後を追っていく。二人が出ていくと、紅は最初と同じように机に腰掛けた。
「なかなか、将来有望だな」
「鋭という男が私には信用なりませぬ」
呟いた紅に答える声があった。静かな声だ。
「ネイバー、そう言うな。彼の調べはついている。彼の両親は、闇にいたそうだ。ならば、ここへ彼が来るのは必然。一度、闇に落ち

た者は、その子孫も含めて再び光の下へ留まることは出来ない。だからこそ、夜光があるのだ。全ての闇の者に、光を浴びせてやれる存在が。全ての闇の者が、いつか光へと戻れるように――――」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6685f/

-BLACK DEVIL-

2010年10月28日03時40分発行